

ラブコール

技術センター運営委員

情報メディア教育研究センター長 相原 玲二



情報メディア教育研究センター()は、本学全構成員が使用する電子メールサーバやキャンパスネットワーク、 などの管理運用を行っています。全構成員が、ほぼ毎日利用している情報基盤の管理を担当しているため、受付の電話が頻繁に鳴ります。電話の問合せ、 ページ経由の問合せ、さらに事務室への直接訪問を合わせると、 全体で1ヶ月に1,000件を超えることも珍しくありません。質問の内容によっては解決に時間のかかるもの、あるいは解決できないものもあります。 スタッフは毎日多くの質問を受けていますが、問合せをした利用者は初めて に質問する場合も多く、あれこれ自分で悩んだ挙句、問合せようと決意したに違いありません。これは秘かに想いを寄せる人へのラブコールと似ています。問合せを受ける誰もが「これはラブコールだ!」と思えるようになれば素晴らしいです。

が管理運用しているキャンパスネットワーク、 の歴史は、1997年度(平成9年度)に導入された、 から始まりました。その後、度の追加整備や更新などを経て、現在は2000年度(平成12年度)に導入された、 2000 が運用されています。 2000 の導入前までは、各部局等がサブネットの管理運用を行い、 は主に基幹ネットワークと学外接続の運用を担当するという体制でした。サブネット管理体制は、部局によって多少の違いはありますが、部局教職員のボランティア的的努力で成り立っていました。 の稼動以来、約14年間続けられたサブネット体制ですが、セキュリティインシデントの多発などのため、部局管理者の負担は限界に達していました。そのため、 2000 では、原則としてサブネットを廃止し、ホスト()単位で が一元管理するよう、ネットワーク構成と管理方針を大幅に変更しました。 2000 への移行は、全学のほぼすべてのネットワーク構成が変更され、 の アドレスが変更されました。各部局等では、主な建物、主な階の (電気系パイプスペース)内でネットワーク配線の差し替え作業が発生しました。 2000 への移行には約1年間をかけて部局の都合を優先して実施しましたが、技術センター技術職員(2名)の皆さんに移行支援に加わって頂きました。この支援がなければ、 2000 へのスムーズな移行は実現しませんでした。

現在、技術センターから へは2名の技術職員を派遣し、常駐による業務を行っています。もともと、全学の情報基盤を支える の業務における技術職員の業務量は多く、全学に分散していたサブネット業務を に一元化するのであれば、 の技術職員増員は必須です。しかし、全学的に組織化された技術センターの発足により、今回の、 2000 移行支援が実現しました。センター化の効果が発揮された例であり、全学に技術センターをアピールできる良い機会でもあります。

平成22年 月には、 が管理運用するコンピュータシステムが更新される予定です。これまで は約 0台の教育用端末を導入し、管理してきましたが、新システムでは約1,100台の教育用端末を導入することになっています。台数増加の主な要因は、これまで部局が導入していた端末を、 がリース契約により一括して導入するためであり、全学的な観点で強く求められました。当然、 の負担は増加しますが、部局の負担は大幅に減ります。全学的に見ると管理コストが抑えられる可能性があるというこ

ともありますが、何より、提供する端末の品質を一定水準に保つことができるため、利用者である学生には大きなメリットとなります。教育用端末の管理運用についても、200と同様、技術センターの持つ潜在的な応用力をアピールできる良い機会になるのではないかと期待しています。

これからの技術センター技術職員には、これまでの枠組みに縛られること無く、ニーズに応じてその技術力を発揮されることを期待しています。情報分野に限らず、あらゆる分野で活躍の機会があると思います。業務依頼・派遣システムも、ニーズにあわせて改良してゆく必要があるかも知れません。学内多方面から技術センターに寄せられる要望は「ラブコール」なのです。片思いにならないよう、皆さんで工夫し、努力されることを期待しています。